

地球は面白い

一九九四年にケンブリッジで暮らしていた時、三日間だけオックスフォードを訪れた。

町のなかに四十五ばかり点在する学寮の総合体をオックスフォード大学と称するシステムはケンブリッジと同じ。オックスフォードのほうが若干歴史は古い。車で町を一周すると、冷暗色の石の建築が多いせいかな、なんとなく威圧感を感じる。

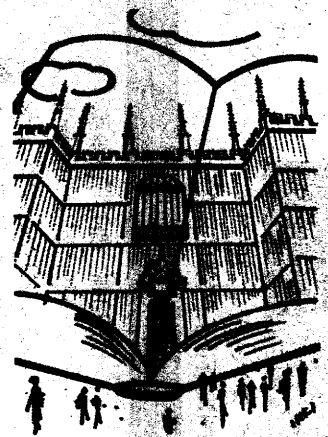
(二)には世界最古の図書館ボトリアン図書館がある。イギリスで印刷された書物はすべて一冊ずつここに集められるので、ケンブリッジを見つからない本もここにはある。しかし、しかし入り口の扉が重く、扉を開くには紹介状が必要。もともと本を借りよつと扉が開かない。

イギリス・オックスフォード

中野 香織

アカデミックな特権残る

い言葉(日本語版もある)読み上げさせられ、本を注文して地下書庫から出てくるのを半日待たされたあげく、ようやく手にすることができた。喜びもつかの間、閲覧できるのは決まった薄暗い場所に限られ、無断コピーも禁止である。滞在日数に限りがある利用者を不幸が横切る人を見る。ああ、フェロ―だ、とわかる。芝生を横切る特権を与えられているのは、学寮の特別研究員の身分にあるフェロ―と呼ばれる人だけである。ケンブリッジにも共通する。こんなアカデミックな特権は、学寮での食卓にも及ぶ。フェロ―は毎日無料で食事を食べる権利を与えられるばかりでなく、学生たちよりも一段高い床に設置されるハイテーブルなる食卓で黒いガウンを纏(まと)って食事をする。学問と書物が尊重され、アカデミックな階級制が厳然と生き残るオックスフォードは歴代首相や有名作家を数多く送り出してきた。と同時に、ミスター・ヒーンで有名なローワン・アトキンソンをはじめ、過激なコメディアンも数多く輩出している。弁護士かコメディアンか、と悩んだかもしれない彼らの大先輩にチャールズ・ドジソンがいる。数学講師だった彼は、一八六二年、学寮長の娘に甘言をこめておとぎ話を語り始める。カンセンズ・キャグ連発のこのお話は、ルイス・キャロルのペンネームで『不思議の国のアリス』として発表された。愛読者の一人、ビクトリア女王が、次作も送るものにとドジソンに依頼したところ、なんと彼は数学の専門書を送ったそう。ミンスター・ヒーンも真っ青のおとぼけである。



イラスト・下田 一貴

(編集者)